

赤ひげ先生 奮闘記!

Vol.3

今年4月にリニューアルした愛知県豊川市の可知病院。回復期リハビリテーションを軸に地域医療に取り組む院長の可知裕章先生を訪ねました。

**目指すゴールは
笑顔でいつもの生活に戻ること**

「リハビリテーションは、ただ歩けるようになるといった機能の回復だけではなく、『何のために歩きたいのか』、この目標がなくてはよくありません。ですから、どれだけ重症であっても『いつもの生活に戻りたい』、『こんなことがしたい』と患者さん自身に心から望んでいただけるよう、気持ちのサポートをしていくことがリハビリの

私たちが患者さんと共に目指す目標は、
リハビリテーションの先にある
生きる喜びです。

PROFILE

可知病院 院長
可知裕章先生

かち・ひろあき 1998年藤田保健衛生大学医学部卒業。豊橋市民病院整形外科、名古屋大学整形外科、厚生連渥美病院整形外科を経て04年より可知病院勤務、05年より現職。日本リハビリテーション医学会臨床認定医、日本整形外科学会専門医、日本医師会認定産業医、臨床研修指導医。



左：運転シミュレーターを導入し、患者さんの無理な車の運転再開の防止や、アドバイスに役立っている。右：「お出かけ先」を意識したスタイリッシュな病院の外観。

Private column プライベートコラム



東京でバンド活動をしていた20歳の頃(写真右)

ヴォーカリストとして バンド活動継続中

学生時代からロックバンドを組み、活動していた可知先生。実は、若い頃に音楽の道を夢見て、ギター1つ持って東京に飛び出したことがあったそう。その情熱を医療に注ぐようになってからも、時々地元の仲間と共にライブハウスなどで演奏を続けています。

在宅復帰後を支える 「お出かけ先」

在宅復帰後の訪問リハビリテーションにおいても、目標設定を大切にしています。「退院して自宅に帰ることができても、目的がないと外に出るのが億劫になり、歩くことも減ってしまう。それでは、せつ

なく「家に戻る」という目標を達成できたのに、また衰えていってしまいませんか。社会との接点を切らさないような目標を定めることが大切です。

この課題解決に向け、可知先生は「どこに行ったらよいか分からない」という患者さんのために「お出かけ先」をつくることを思い立ちます。こうして病院の敷地内に併設された短時間デイケア施設には、開設直後から80人以上の方が通ってこれるようになったそうです。病院のリニューアルに当たっても空間づくりにこだわることでも、患者さんのリハビリに役立たいと考えました。



脳卒中の急性期の病院と回復期リハビリ、クリニックの連携バス強化に向けて、情報提供書の書式を統一するなど、地域連携にも果敢に取り組む。